

柏原市所在遺跡発掘調査概報

—太平寺遺跡・田辺遺跡・平尾山古墳群・北峯古墳群—

1990年度

1991年3月

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市域の遺跡は、大きく分けて2分される。丘陵部には墓域である古墳群があり、平野部には生活の痕跡である集落遺跡が存在している。

近年の開発は、大規模に且つ広範囲に及ぶ傾向があり、平野部と丘陵部の両域にめざましい発展をとげた技術と機械力によってこれまで未踏地であった場所に拡大されるようになった。

本年度実施した原因者負担の開発は、平野部においては高層の建物に伴う工事で太平寺遺跡、丘陵部の造成工事において平尾山古墳群、田辺遺跡、北峯古墳群があった。太平寺遺跡は、古墳時代後期から奈良時代にかけての集落遺跡に関連する遺構を確認した。工事は、建物基礎を検討して遺跡の保存が可能な方法が採用された事から部分的な調査となり大部分が現状保存されることになった。

平尾山古墳群と田辺遺跡は、これまでの分布調査で遺跡の確認されていない場所であるが、試掘調査によって実際に存在しないかを確認したものである。市域で新発見する遺跡も多くあり、見過ごすことのないように対応したいと考えている。

北峯古墳群は、河内国分寺に関連すると考えられる遺構が確認された。申請者が工事の中止を決定された事は、遺跡の重要度をご理解いただけた事例として高く評価したい。今後においても市文化財行政の遂行に市民の方々からのご理解とご協力を祈念するものである。

平成3年3月30日

柏原市教育委員会

教育長 庵刀和秀

例　　言

1. 本書は、平成2年度に柏原市教育委員会が原因者負担事業として実施した埋蔵文化財の発掘調査の中で、太平寺遺跡（90-3次調査）、田辺遺跡（90-11次調査）、平尾山古墳群（91-1次調査）、北峯古墳群（90-1次調査）における概要報告書である。
2. 発掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課文化係北野 重を担当者として、平成2年6月19日に着手し、平成3年1月23日に終了した。
3. 調査に要した諸費用は、それぞれの依頼者が負担した。
4. 調査の実施にあたり、下記の諸氏の参加、協力があった。

松井隆彦	空山 茂	山田顯章	安村俊史	寺川 欽
生駒美洋子	津田美智子	阪口文子	小西千賀子	佐藤芳玲
早川恵子	尾野知永子	奥野 清	谷口鉄治	麻栄三郎
朝田行雄	乃一敏江	有江マスミ		

5. 本書の編集は、北野が行った。
6. 本書で使用した標高と方位は、特に注記のない限りT.P.、磁北で示す。
7. 本調査に際して、写真、実測図と共に当教育委員会で作製保管し、歴史資料館で展示を行っている。広く利用されることを願うものである。

目 次

第1章 太平寺遺跡.....	1
第2章 田辺遺跡.....	13
第3章 平尾山古墳群.....	16
第4章 北峯古墳群.....	18

挿 図 目 次

図-1 調査地位置図	図-11 調査地位置図
図-2 調査区位置図	図-12 調査区位置図
図-3 遺構平面図	図-13 田辺遺跡周辺部の遺跡
図-4 出土遺物（須恵器その1）	図-14 調査地位置図
図-5 出土遺物（須恵器その2）	図-15 調査区位置図
図-6 出土遺物（須恵器その3）	図-16 トレンチ断面図
図-7 出土遺物（土師器その1）	図-17 調査地位置図
図-8 出土遺物（土師器その2）	図-18 調査区位置図
図-9 出土遺物（土師器その3）	図-19 トレンチ平面図
図-10 出土遺物（土師器その4）	

図 版 目 次

図版1 太平寺遺跡	図版7 田辺遺跡
図版2 太平寺遺跡	図版8 平尾山古墳群
図版3 太平寺遺跡	図版9 北峯古墳群
図版4 太平寺遺跡	図版10 北峯古墳群
図版5 太平寺遺跡	図版11 北峯古墳群
図版6 太平寺遺跡	図版12 北峯古墳群

第1章 太平寺遺跡

本年度に実施した太平寺遺跡内の調査は、4件あった。当地域は、白鳳時代創建の智誠寺を中心とした遺跡である。現在その周辺部は、太平寺の集落であり家屋が密集している。

本調査は、平成元年1月に共同住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘の届出書の提出により（柏原市太平寺2丁目10-19）、原因者負担事業として実施したものである。

調査は、遺跡深度により建物基礎部分は慎重工事で対応し、掘削深度が深い浄化槽部分において、平成2年6月19日から6月26日まで実施した。

調査面積は、敷地703.31m²の内、21m²である。当初鋼矢板の打ち込みを予定していたが、アングル鉄板に板材をはめ込んで実施した。しかし、当初から安全対策に万全を期するように申し入れていたが、一部壁面が倒壊した。再度外枠の打ち込みを行い予備としてジャッキの張りを入れた。

調査の結果、当初の予測通り、古墳時代後期から奈良時代にかけての集落遺跡の遺構と遺物を検出した。



図-1 調査地位置図

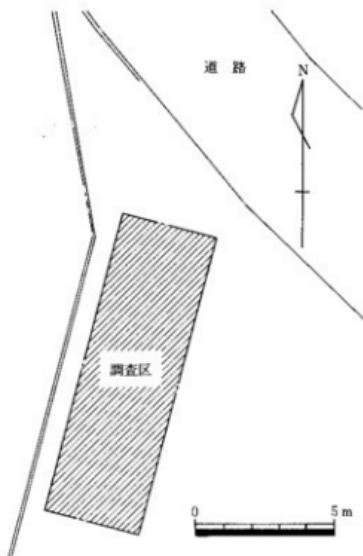


図-2 調査区位置図

調査は、 $3.1 \times 7.0\text{m}$ の浄化槽予定地において実施した。

基本土層は、次の通りである。

第1層は、近年の盛土が約1.5mある。

第2層は、旧表土で耕作地（畑）の土層で茶灰褐色砂質土が約50cm確認した。

第3層は、5~20cmの礫を少し含む灰茶色砂礫土が30cmを測る。当調査区は、生駒山地の谷筋部にあたり小河川の縁近くであるので、氾濫原の土層であろう。

第4層は、灰褐色砂質土である。約20cmの厚さがある。シルト質の土層も多く含んでいる。中世以降の堆積ではないかと考えられる。

第5層は、約30cmの暗茶褐色粘質土である。古墳時代後期から奈良時代にかけての遺物包含層である。さらに2~3層に分離が可能である。

遺構は、第5層の遺物包含層を除去する途中で、東側の部分で1~5cmの大いさに割られた須恵器や土師器片を多く含む土層面を確認した。奈良時代と考えられるが、道路又は生活面が存在したと考えられる。2×3m範囲で確認されたが、側壁の崩壊によって遺構の性格を明確にすることが出来なかった。

全体に遺物包含層を除去した段階で、溝1、ピット1を検出した。

溝1

調査区の中央部で検出した。溝の方向は、東側から西側へ向けて真直ぐ伸び、円弧を描いて北側から南側に向かっている。溝の幅は、80~130cmである。溝の深さは、35~50cmである。

埋土は、粘土質と砂層が交互に堆積し、非常に多くの遺物を含んでいる。第2セクションでの土層は次の通りである。第1層、青灰色粘質土、第2層は、暗青灰色砂土である。第3層、灰褐色粘質土。第4層、灰褐色シルト。第5層、灰褐色粘質土である。第1層を上層とし、第2、3層を中層、第4層を下層、第5層を最下層として遺物の取り上げを実施した。

ピット1

溝1の南東部約1mの距離を隔てて検出した。約60cm四方の隅丸方形のピットである。埋土は、青灰褐色粘質土である。中に16~18cmの円形柱穴がある。深さは、約5cm程で遺存状態は悪い。

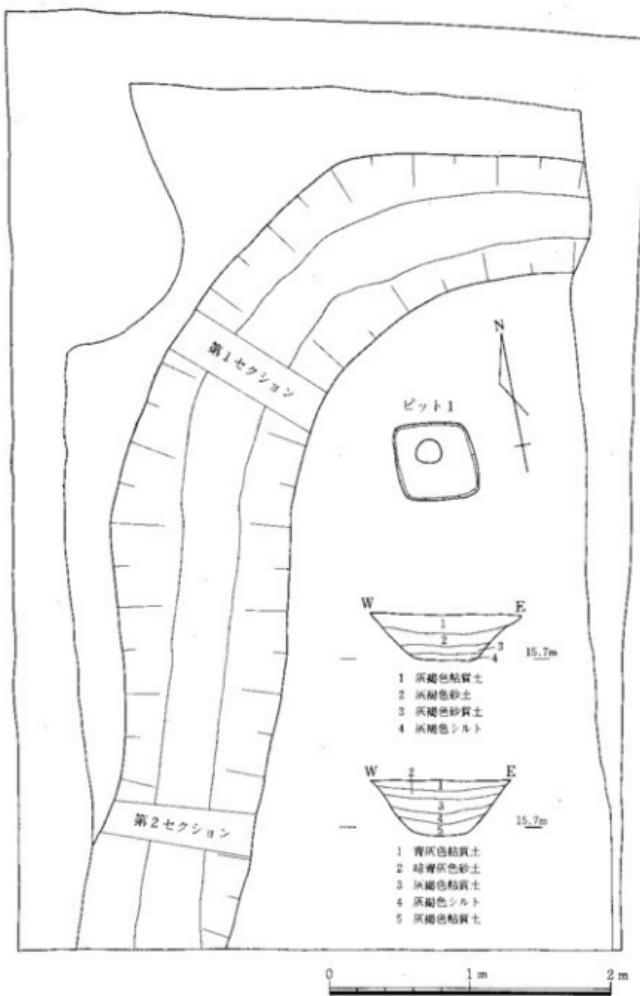


図-3 遺構平面図

出土遺物は、溝1の埋土から出土した須恵器、土師器を中心として、獸骨（馬）、木器等がコンテナ10箱分出土した。

遺物は、時期が明確である須恵器と土師器についてそれぞれ述べていきたい。

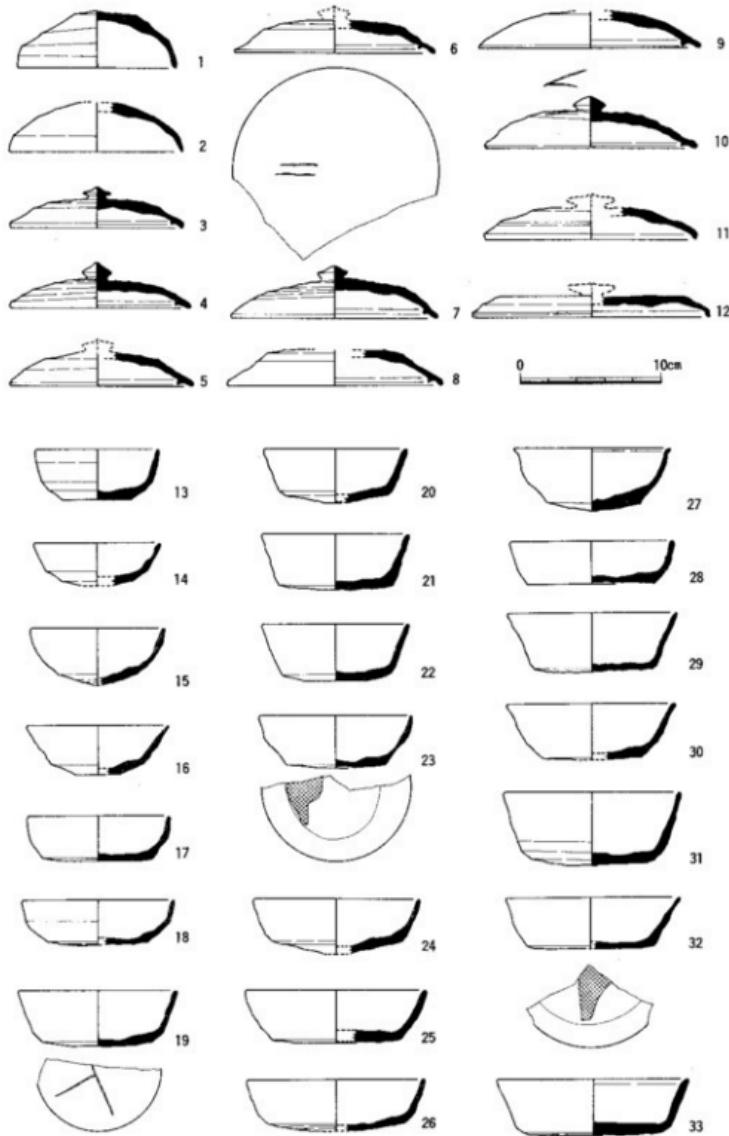


図-4 出土遺物（須恵器その1）

須恵器（図－4～6、1～65）

須恵器は杯蓋・杯身がもっとも多く、高杯・皿・壺・鉢・甕が出土している。

杯蓋にはつまみのあるものとないものがある。前者には天井部が高く丸味をもち、口縁部が丸いもの（1・2）、後者は天井部に丸味をもち、外面中央に擬宝珠様つまみを付し、口縁端部は丸く内傾するかえりをもつもの（3～10）、天井部がやや平らで、外面中央に扁平な擬宝珠様つまみを付し、口縁部は垂直に下り、端部が丸いもの（11・12）がある。天井部の調整は、回転ナデ調整のもの（2・9・11）があるが、ほとんどは回転ヘラ削りで、他は回転ナデ調整である。天井部にヘラ記号をもつもの（7・10）がある。

杯身は高台のあるものとないものがある。前者には底部に丸味をもち、口縁部が上外方にのび、端部が丸いもの（14～16）と底部が平らなもの（13・17～26・28～37）、底部に丸味をもち、口縁部は外反し、端部が丸いもの（27）がある。調整は底部外面ヘラ削り、他は回転ナデで仕上げている。（32・35）はヘラ切り未調整である。後者には底部が平らで、底端部よりやや内側に、八の字型の高台を付し、端部は内傾する面をもち、内側で接地するもの（40～43・45～51）と外側で接地するもの（38・39・44・52）がある。体部から口縁部は上外方にのび、端部は内傾する面をもつもの（43・50）の他は口縁端部は丸い。調整は底部外面ヘラ削り、他は回転ナデ調整である。底部外面にヘラ記号（19）と朱記号（23・32）をもつものがある。

大皿（55）は底部がやや平らで、口縁部は上外方に向かい、端部は内傾する面をもつ。底部外面はヘラ削り、他は回転ナデ調整である。

高杯（56）は口縁部が外反気味に上外方に向かい、端部は丸く、底部は平ら。脚部は下外方に下り、沈線2条をめぐらし、襷部で大きく開き、下方へ屈曲し接地する。調整は底部外面にヘラ削り、他は回転ナデ調整。

甕はいずれも口縁部から肩部にかけて残存しており、口縁部は外弯し、端部が比較的丸いものの（57・58・61）と口縁部に1条の凹線がめぐり、端部がやや鋭いもの（59）がある。調整は（57）は回転ナデ調整。（58）は外面をカキ目調整、内面を同心円叩きで仕上げている。（59）は外面を平行叩き、内面は円弧叩き、頸部は叩き後スリ消している。（61）は外面を平行叩き、内面を円弧叩きで仕上げている。

壺（63）は口頸部が欠損している。肩部は大きく下外方に開き、下内方に屈曲し体部を成す。底部は平らで、底部端には八の字型の高台を付し、内側で接地する。体部外面1/3をヘラ削り、他は回転ナデ調整である。

鉢は体部が内弯気味に上内方にのび、口縁部で外反し、端部で内傾する面をもつ（62）とすり鉢の（64）がある。どちらも共に回転ナデ調整。他の器種に直口壺あるいは平瓶の口縁部と思われる（53）がある。（60）は蓋杯の小片と思われる一部に、黒漆が付着している。

以上これらの土器は、陶邑編年のIII型式2～3段階に属すると考えられる。（阪口）

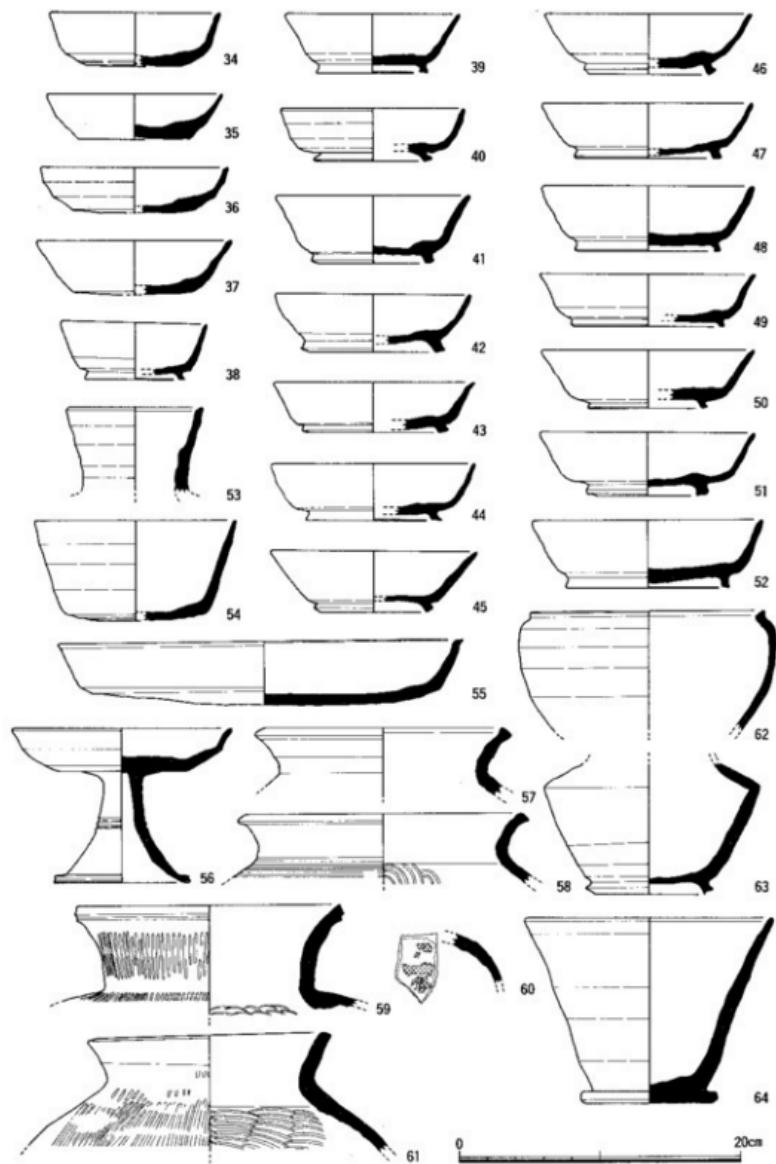


図-5 出土遺物（須恵器その2）

65は、壺の体部の破片である。出土土層は、奈良時代の道路敷又は生活面と考えられる遺物包含層からである。色調は、青灰色。胎土は、小石を少し含むが精良である。調整は、外面を平行叩きした後クシナデ調整をしている。内面は、車輪文と云う叩きが施こされている。柏原市域から初見の遺物である。菊花文が中心部にあり、2重の円弧が巡り内外区に分かれる。内区は、菊花文で3mmの中房に14弁の花弁が付く。自然釉が内面全体に付着している。

土師器 (図-7~10, 66~145)

土師器は、杯、皿、高杯、壺、壺、鉢、鍋、椀等がある。それぞれ器種毎に説明を加えていきたい。

杯 (図-7, 8, 66~109, 114~118)

杯は、土師器の器種の中で最も出土量が多い。出土した須恵器の時期が陶邑編年III型式2から3段階のものが多く層位的に対比することが出来る可能性がある。

杯の口端部の形態を5分類すると次の様である。

A類……体部から伸びた端部がそのまま丸く終わらせる。

B類……端部を外上方へ小さく折り曲げる又は内面に傾斜面を作る。

C類……A類の端部内側に沈線を入れる。

D類……端部を外上方へ折り曲げる幅がB類より広く、A類の端部のように終わらせる。

E類……D類と同じく外上方へ折り曲げる。端部が内側に小さく折り曲げ肥厚させる。又は内側に段を付ける。

A類は、10点がある。小型の杯(72・73)を除くと径高指数(口径/器高)平均3.58である。内面の調整は、放射状暗文と内底面にラセン暗文があるものが多い。76のみ2段の放射状暗文がある。大小型に属する杯(72・73・76・102・103)は、外面にヘラ磨きを施している。又、底部にヘラ削り痕が認められる。他の杯は、板状のものか指でナデ調整している。

B類は、10点ある。径高指数は、3.22と4.12に大きく分かれる。内面の調整は、ほとんどのものが放射状暗文とラセン暗文がある。外面の調整は、ヘラ磨きやヘラ削りを行うものなくすべて指押さえ又は指ナデ調整である。口径の大きなものが少なく(106)、14.5cm(95)までのものが多い。

C類は、10点ある。口縁端部内側に細い棒状のもので沈線を入れる特徴的なものである。径高指数は、3.59である。92と94の径高指数が少し高目であるのは、それぞれ遺存状態20、10%



図-6 出土遺物(須恵器その3)

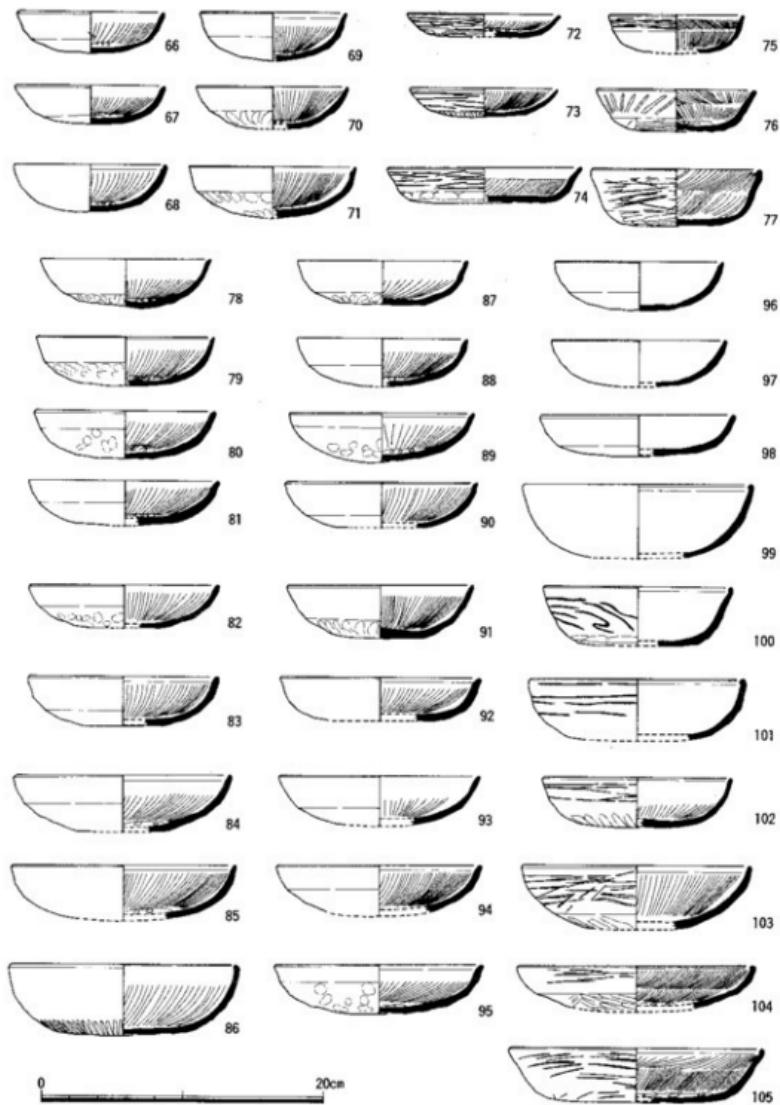


図-7 出土遺物（土師器その1）

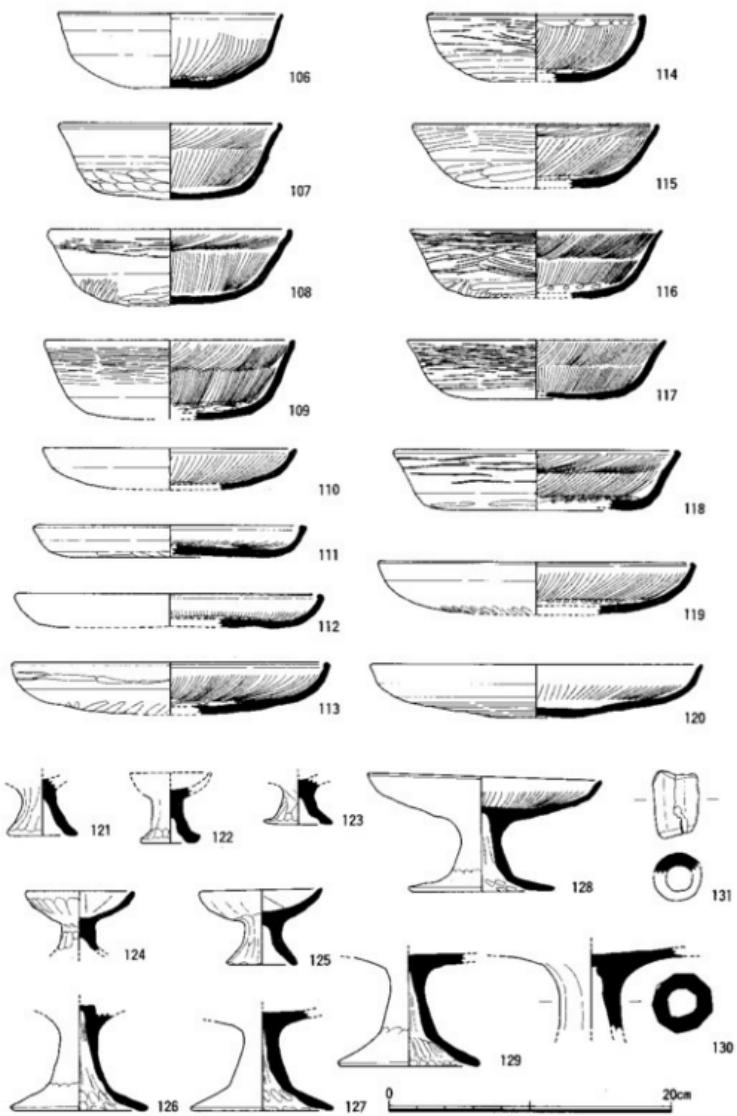


図-8 出土遺物（土師器その2）

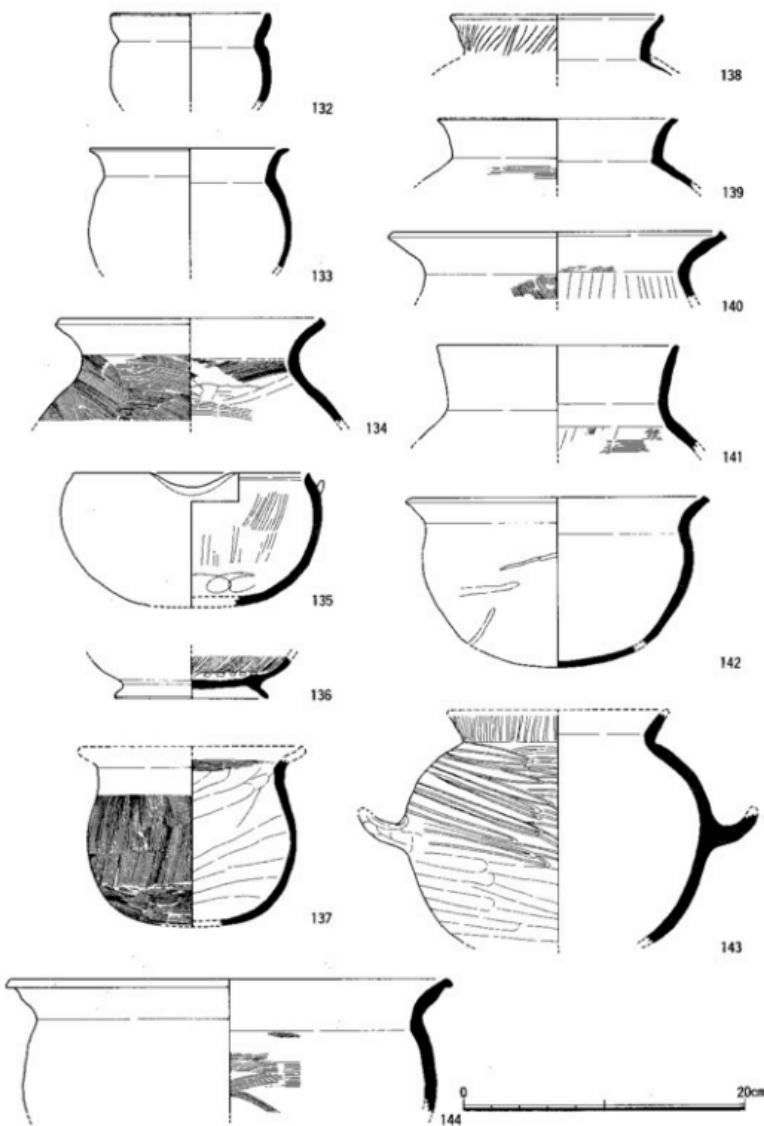
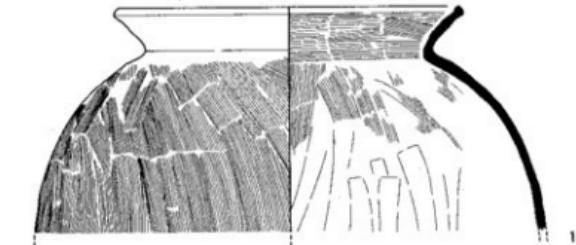
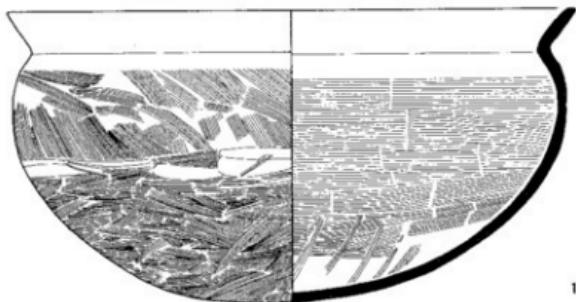


図-9 出土遺物（土師器その3）



144



145

0 20cm

図-10 出土遺物（土師器その4）

と悪いため器高に若干の誤差が生じたと考えられる。内面の調整は、ほとんどのものに放射状暗文とラセン暗文がある。この類に2段の放射状暗文があるものはない。外面の調整は、B類と同様にヘラ磨きとヘラ削りを行うものがなく、ほとんどのものが指による調整である。口径が小さいものが多く、最大の85(15.6cm)以下である。

D類は、2点ある。112と113である。口径が、17.6、18.1cmと大きい。径高指数は、3.63、4.31である。内面の調整は、2段の放射状暗文があり、両者共ラセン暗文も見られる。外面調整は、密なヘラ磨きがあり、底部をヘラ削りを行っている。ヘラ磨きは、他の類のヘラ磨きをもつものより丁寧である。

E類は、15点ある。径高指数は、5.03と3.21の2つに分かれる。前者は、小型の74と大型の104、105と114である。後者はそれ以外である。口径の小さい74、77、87、100は、11.6~13.5cmを測る。大きいものは、14.7~19.8cmである。内面の調整は、ほとんどのものが放射状暗文とラセン暗文がある。外面の調整は、ヘラ磨きが10点、ヘラ削り12点認められた。

これらの杯の胎土は、石英、長石、金雲母、クサリ礫等を含みやや粗いものが多い。色調は、橙褐色から茶褐色系統のものが多い。当地域産のものである。

皿は、115～120の6点がある。径高指数は、5.92～8.83まである。胎土は、石英、長石、金雲母を含み精良である。当地域産の胎土である。内面の調整は、すべて放射状暗文があり、120以外にはラセン暗文を施している。外面の調整は、117が指ナデ調整している以外はすべて底部をヘラ削りしている。杯で行った口縁端部の分類で言えば、120がB類に属する以外はE類である。

121～125は、小型手捏高杯である。杯部と脚部が割れているものが多く125のみが復元される。杯部は浅く内面を平滑に板ナデしている。脚部は、全体としてしっかり踏んばっている。125は、口径8.4cm、器高5.4cm、底径4.8cmである。胎土は、石英、長石、金雲母等の砂粒を含みやや粗い。色調は、淡橙色である。126～130は、大型の杯である。128は、口径16.4cm、器高8.4cm、底径9.8cmを測る。杯部は、口縁端部内側に浅い沈線を入れる。内面は、ラセン及び放射状暗文がある。外面は、板ナデ調整である。脚部は、細く伸び途中で外方へ拡がる。端部は丸く終わる。折れ曲がった下部の表面は、板ナデ調整で裏面は指ナデ調整である。胎土は、石英、長石、金雲母を含み良好である。色調は、茶橙色である。130は、上層包含層から出土した9面の面どりした高杯脚部である。

132は、広口の壺である。口縁部は内弯気味に外上方へ伸び、端部は水平方向に平坦である。体部の最大径は、口径より小さい。体部外面は、雑なヨコナデである。141は、直口壺か。体部内面はハケ目状の板ナデである。143は、把手付壺である。口縁部は短く上外方に真直ぐ伸びる。口縁部外面と体部上半部にヘラ磨きがある。体部下半部は、ヨコ方向のヘラ削りである。

鉢は、3点ある。135は、口縁部が内弯し、端部を上方へ小さく折り曲げる。端部内面に沈線が入る。片口である。142は、大きく外側に外反する口縁部を持ち、端部は方形に終わる。内面は板ナデによって平滑に仕上げているが、外面は粗面である。部分的にヘラナデ痕がある。146は、口径40cm、器高20.8cm。内外面は密なハケ目状の板ナデがある。

壺は、全形を知りえるものが少ない。137は、口縁部が欠損している。体部外面はハケ目で内面をヘラ削りで仕上げている。134、138～140、144、145は、それぞれ口縁端部の形態が異なる。138は、口縁部外面にヘラ磨きがあり壺に含まれるかもしれない。

今回の調査で出土した遺物は、この他に鉄滓、馬骨、木等がある。

第2章 田辺遺跡

本調査区は、柏原市田辺2丁目2110-3外における民間住宅開発に伴う事前緊急発掘調査として原因者負担によって実施したものである。

田辺遺跡は、史跡田辺廃寺を中心とした集落遺跡である。昭和57年、田辺廃寺のある丘陵の谷を隔てた東側丘陵上から19基の古墳を発見した。この古墳群は、火葬墓が古墳の直ぐ近くに存在して、田辺廃寺跡の東塔の基壇に使用している壇と同様の壇が出土した事から田辺古墳群と名称した。また、昭和59、60年、田辺遺跡の南側から東側にかけての明神山山系の分布調査を実施した結果、丘陵稜線近くの南側斜面に13基の横穴式古墳を発見した。この古墳群は、字名から北峯古墳群と名称した。

こうした古墳群の新規発見から、当調査区においても丘陵の斜面に古墳が存在する事も考えられ、トレンチ調査を実施した。期間は、平成2年11月20日から11月22日まで実施した。

調査の結果、遺構と遺物は検出されなかった。当調査区の在る丘陵の直ぐ南側に近鉄奈良線の新駅（大阪教育大学前）が予定されており、開発が進むと考えられるので念の為報告する。



図-11 調査位置図

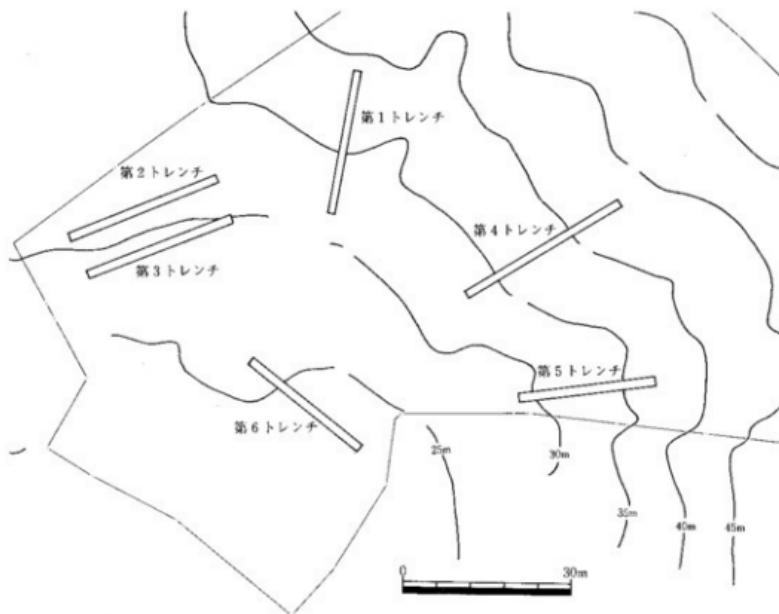


図-12 調査区位置図

調査は、樹木や下草の伐採を実施し、重機による掘削後人力により断面と平面を整掃して遺構の確認を行った。

当該地の標高は、16~48mまでを測る。下方はやや緩い斜面地であるが、上方は急激な斜面となっている。トレンチは、下方の標高18~34mまでの間にある小尾根上か西側斜面に6本を設定した。

第1トレンチは、東側の小尾根筋に設定した。長さ21.0m、幅1mである。表土除去直ぐ黄褐色粘土の地山を確認した。遺構と遺物は確認されなかった。

第2トレンチは、第1トレンチの北側に丘陵西側斜面の標高20~22m添いに設定した。長さ24.0m、幅1mである。ぶどう畑の耕作土直ぐ下が黄褐色砂礫土の地山が確認された。

第3トレンチは、第2トレンチ西側に設定し、同様の結果を得た。

第4、5トレンチは、標高18~34mまでの急な小尾根筋に設定した。長さは、28、21.5mである。幅はそれぞれ1mである。遺構と遺物は確認されなかった。

第6トレンチは、一番下方の谷筋内に設定した。長さ21m、幅1mである。深さは約1mの盛土があった。遺構と遺物は確認されなかった。

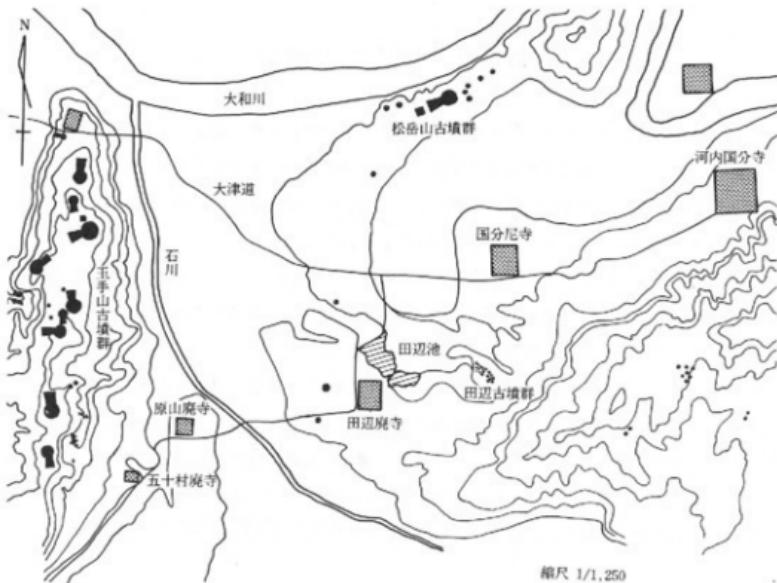


図-13 田辺遺跡周辺部の遺跡

田辺遺跡は、古墳時代から奈良時代までが中心の遺跡である。その歴史的環境を田辺遺跡を中心として描いたのが上図である。

田辺遺跡は、北側に生駒山地と南側に金剛山地、東側に明神山系と西側に玉手山丘陵が四方に囲んでいるなどらかな丘陵上に位置している。丘陵は、田辺池のある谷筋部で大きく2つに隔てられている。北側の丘陵は、松岳山古墳群が大和川添いの東西方向から南側に伸びさらに東側の国分尼寺や国分寺へ連なっている。南側の丘陵は、田辺廃寺を中心に置き西側の石川まで伸びる。この2つの丘陵は、遺跡の性格が幾つかの理由から異なるかもしれない。1つは、その副葬品から大和朝廷の有力豪族の被葬者が考えられる松岳山古墳があり、時期が少し下がるが河内国分寺や国分尼寺が建立される地域である。2つ目は、近年の調査で鉄器生産を行った大規模な工房址が発見され、鉄器生産専門工人が居住した事が考えられる。これらの工人を支配した豪族は、松岳山古墳群の被葬者集団あるいは国分寺を誘致した氏族のどちらかと強い関係が伺える。

- 1) 「河内松岳山古墳の調査」 大阪府教育委員会
- 2) 「田辺遺跡」 柏原市教育委員会 1989

第3章 平尾山古墳群

近年平尾山古墳群内において残土処分による谷筋部の埋立工事が顕著である。本調査は、雁多尾畠3014外における埋立工事に伴う原因者負担の事前緊急発掘調査である。

本調査区は、平尾山古墳群の雁多尾畠支群内に含まれ古墳の存在は確認されていない地域である。ほとんど盛土工事のため影響を受けないが念のため実施した。

第1トレンチは、南北方向に伸びる尾根筋の稜線上に幅2m、長さ15.5mの規模で設定した。表土20~40cmがあり直ぐ花崗岩のバイラン土（地山）である。遺構と遺物は確認しなかった。

第2トレンチは、尾根筋の東側斜面に南北方向7.5m、東西方向8.0mで設定した。表土30~50m除去して直ぐ花崗岩のバイラン土（地山）を確認した。遺構と遺物は確認しなかった。

第3トレンチは、尾根筋の東側斜面の第2トレンチより北側へ設定した。規模は、南北方向8.0m、東西方向3.5mである。このトレンチでも遺構と遺物は確認されなかった。

調査の結果は、古墳が発見されなかった。しかし、今後同様の工事が増加すれば、東山丘陵全体の文化財環境に何らかの影響が考えられる。対応を考えなければいけない時期が来ている。

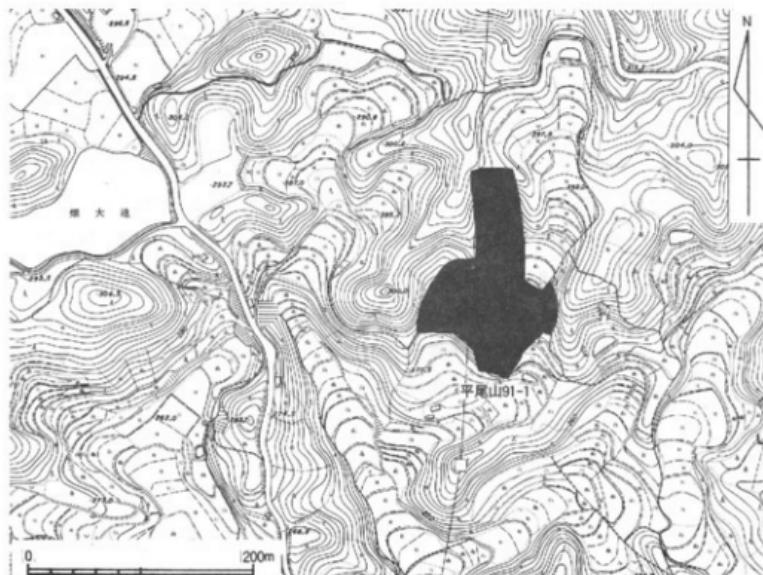


図-14 調査地位置図

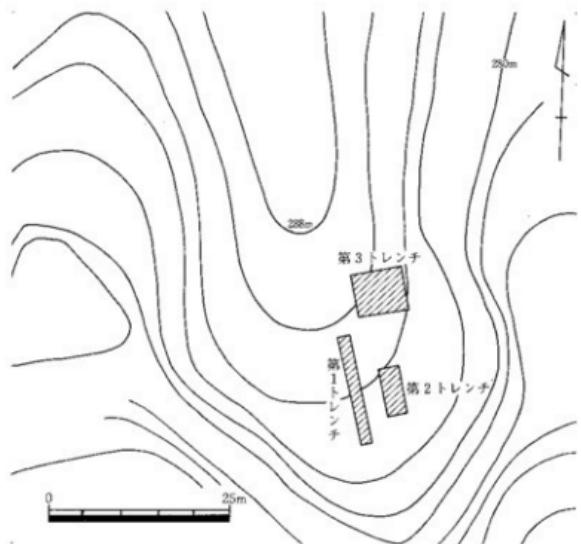


図-15 調査区位置図

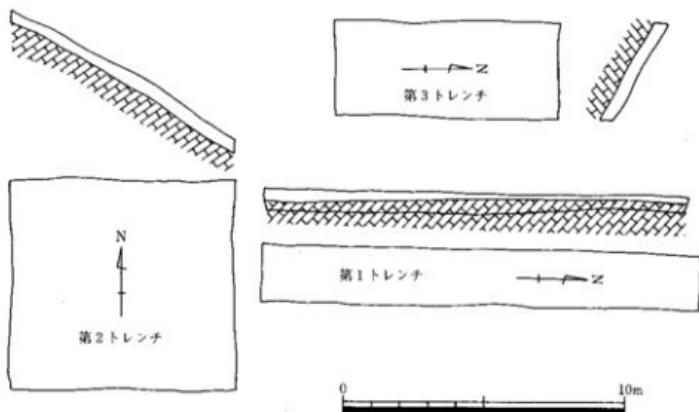


図-16 トレンチ断面図

第4章 北峯古墳群

北峯古墳群は、昭和59、60年に柏原市教育委員会が国庫補助事業として実施した分布調査で発見した古墳群の名称である。古墳の存在する地域は、明神山山系の稜線上あるいはその近くの斜面上である。標高は、140～170mまでの比較的高位である。大和川の対岸にある平尾山古墳群は、標高350mまで古墳が確認されている。

本調査区は、柏原市国分東条（ひがんじょう）町3754他（面積3,350m²）における駐車場造成工事に伴う原因者負担の事前緊急発掘調査である。当該地内に6ヶ所のトレンチを設定して調査を実施した。調査方法は、重機による機械掘削後人力により遺構の確認に努めた。期間は、平成2年7月17日から7月25日まで実施した。遺構を検出し、申請者と協議を実施した結果、盛土等の工法も検討されたが、工事を中止する回答を得た。

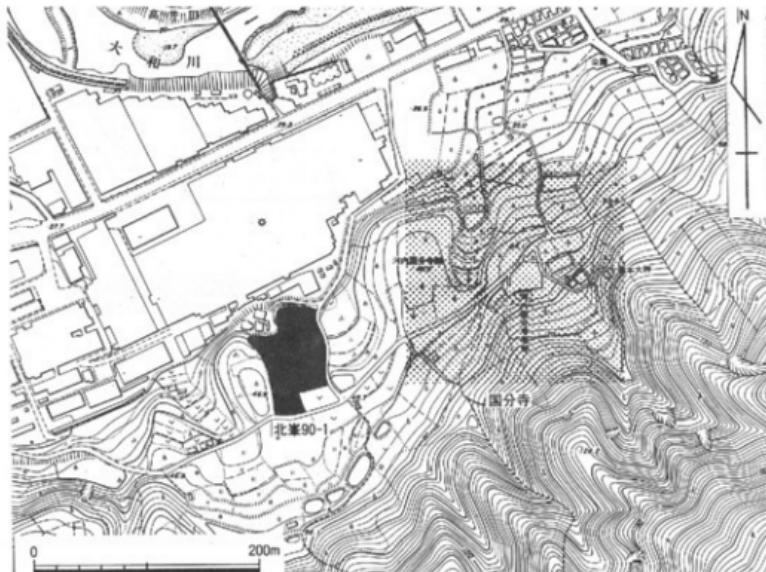


図-17 調査地位置図

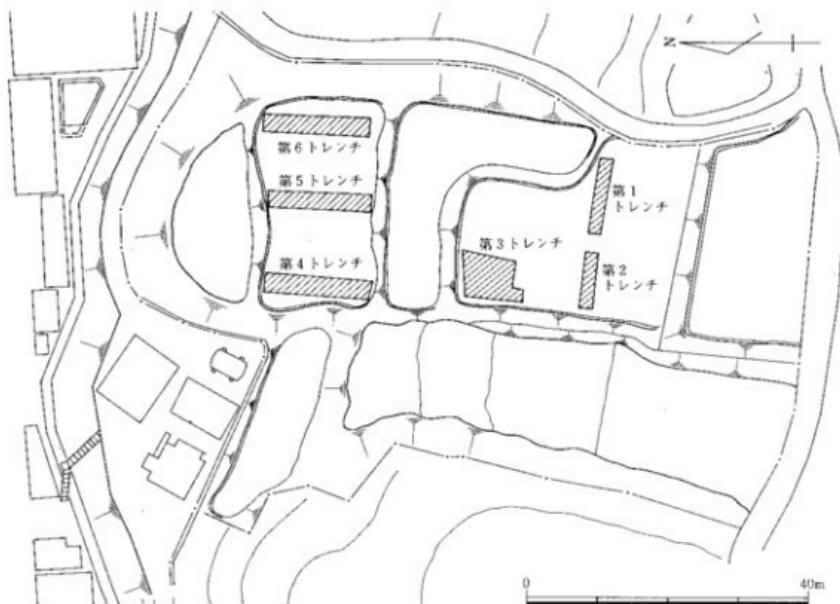


図-18 調査区位置図

当該地に6ヶ所のトレンチを設定した。各トレンチにおいて遺構と遺物を検出したので略記したい。

第1トレンチは、南東部の最も標高の高い位置に設定した。規模は、南北方向2m、東西方向約11mである。現状は、畠地である。耕作土が約20~30cmあり、約10cmの遺物包含層を確認した。黄褐色粘質土で茶褐色を呈する斑点を含む土層である。遺構は、3ヶの方形掘方を持つピットを確認した。各ピットは、出来る限り保存する方針で掘り下げるのを止めたため深土は不明である。ピット1は、35~40cmの一辺を持つ。柱穴は確認されなかった。ピット2は、ピット1から東側へ約4m離れた場所で検出した。一辺70~80cmを測る。このピットは柱穴と考えられる部分の上層から平瓦の破片が出土した。

ピット3は、ピット2の直ぐ東側60cm離れて検出した。1辺85~90cmの規模である。径35cmの柱穴跡を確認した。恐らく建物の一部の遺構であろう。

第2トレンチは、第1トレンチの西側へ続きに設定した。規模は、南北方向2m、東西方向8.2mである。土層は、第1トレンチと同様である。トレンチと同一方向の段を確認した。古い時代の落ち込みか耕作に関わるものか不明である。直ぐ北側に畦があることを考慮すると後者の可能性が高い。

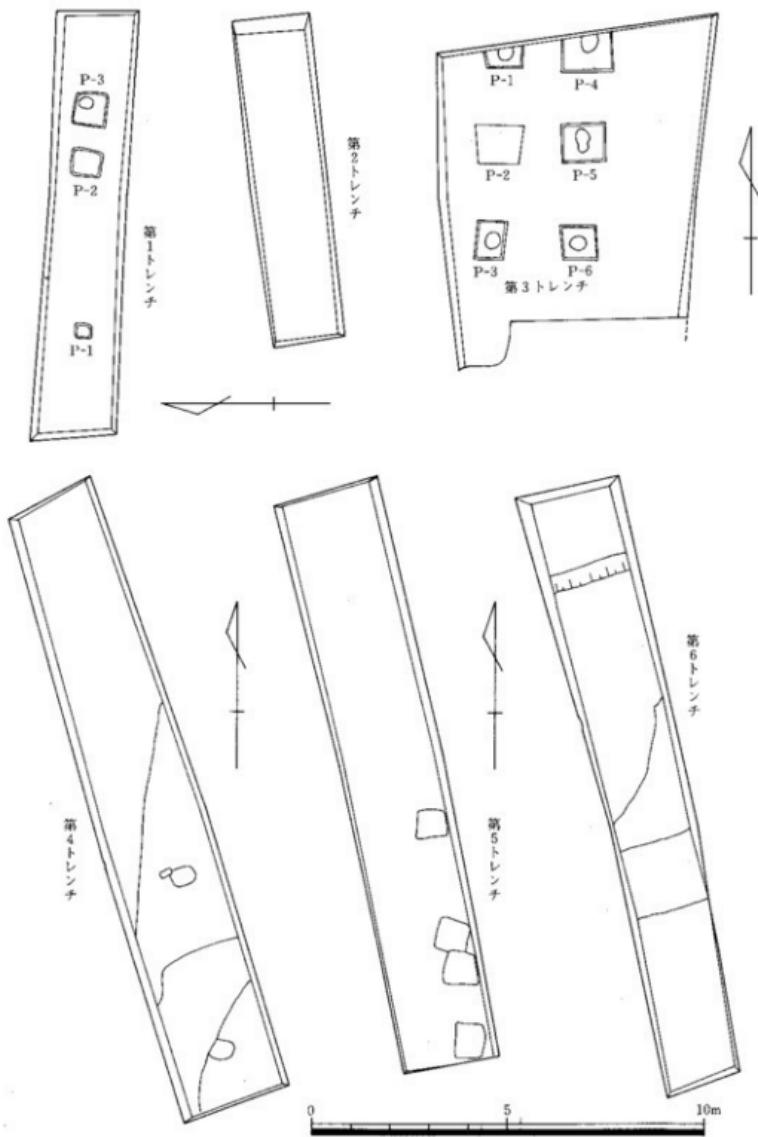


図-19 トレンチ平面図

第3トレンチは、第1、2トレンチのある面より一段低い平坦面に設定したトレンチである。当初東西方向に長いトレンチを設定していたが、ピットを確認したので拡張して調査を実施した。トレンチの規模は、南北方向約8m、東西方向7mを測る。遺構は、6ヶのピットがほぼ南北方向に2列並んで検出した。建物を構成するピットであろう。

ピット1は、北西隅のピットで、一辺95cm以上である。南半部だけを検出した。35cm径の柱穴がある。ピット2は、攪乱によってほとんど削平されていたが、他のピットと同様の埋土が下層に遺存していたのでピットとした。規模は不明である。ピット3は、さらに南側で検出した。掘方一辺は、南北方向1m、東西方向80cmである。柱穴径は、40cmを測る。ピット4は、ピット1の東側で検出した。掘方一辺の長さは、東西方向1.3mで南北方向は確認していない。柱穴径は、45cmである。ピット5は、ピット4の南側に検出した。南北方向約1m、東西方向1.15mである。柱穴は、抜き取り痕のためか南北に長い橢円形で検出した。

ピット6は、さらに南側で検出したピットである。南北方向85cm、東西方向90cmを測る。柱穴径は、40cmである。

柱穴間の距離は、南北方向2.5m間隔である。東西方向は、2.1~2.2mである。建物の規模は、北側と西側に延びる可能性があるが、南側と東側は端部であると考えられる。時期がわからるような遺物が出土していない。

第4トレンチは、第3トレンチより約2m近く下がった平坦面に設定したトレンチである。南北方向約16m、東西方向2.3~2.8mである。南端部は地山（黄褐色粘土）であるが、北側に向かって盛土が施されている。表土を除去した面で遺構の検出をしたが、土層の違いが判明した。南側の円形に近いピットは、新しい時期のものであろう。

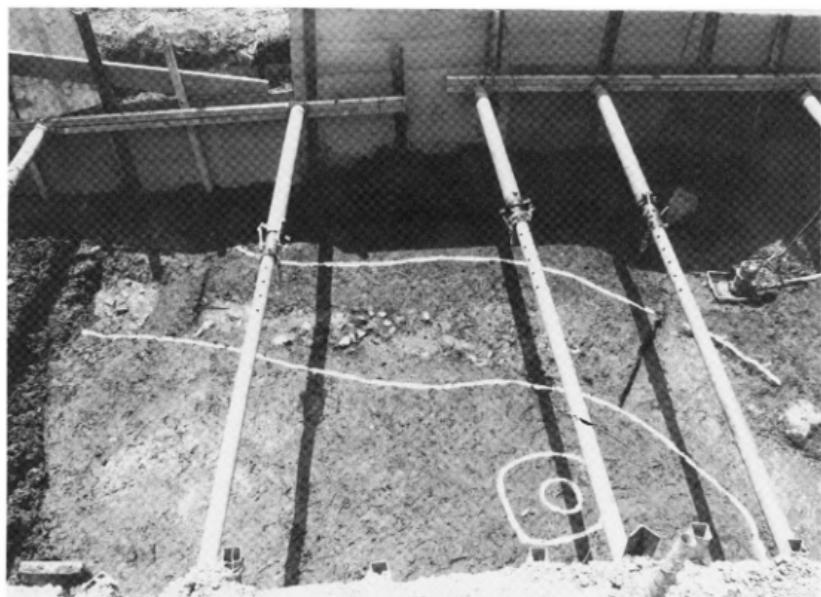
第5トレンチは、第4トレンチの東側に設定した。規模は、南北方向に15.4m、東西方向に2~2.7mである。中程から北側は、盛土である。北端部で約40cm以上測る。やや南側から幅1.7mの東西方向の溝を検出した。西側方向に下向しているようである。第4及び6トレンチでは検出していない。深さは約30cm程である。時期は新しいかもしれない。

第6トレンチは、さらに東側に設定したトレンチである。規模は、南北方向14.7m、東西方向2.5~2.7mである。北側が低く南北比高差が25cm位ある。南側に4ヶの方形ピットを検出した。柱穴は確認しなかった。各ピットは、一辺80cm前後を測る。ピットの一辺方向は、ほぼ磁北の方向と一致しているようである。

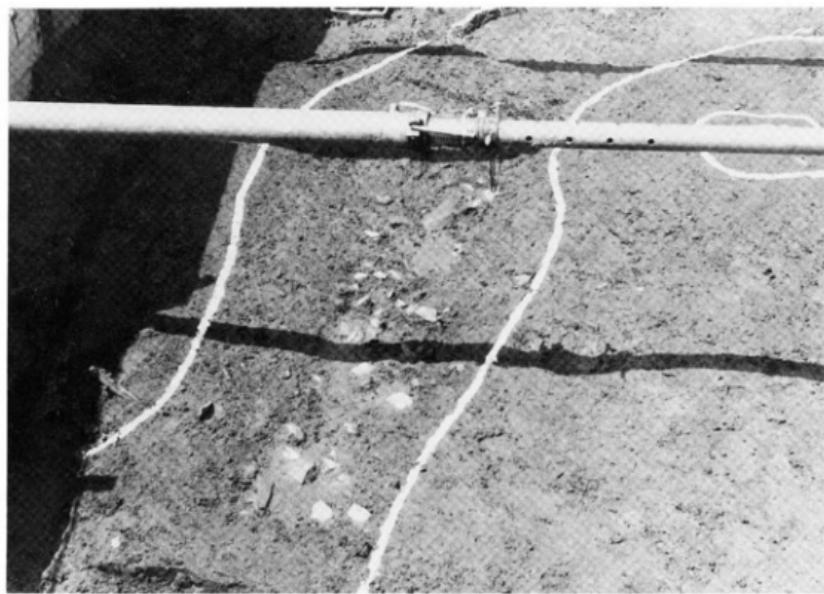
以上各トレンチから検出した遺構について述べた。これらの遺構の性格と時期は、明確でないが、国分寺に関係した可能性は高い。

当初全面調査を実施する予定であったが、遺跡の保存するために工事内容の変更を申し入れたところ、遺跡の重要度をご理解いただき工事を中止することとなった。末筆であるが、東条町区長吉田留治氏と光洋精工（株）総務課長坂本圭司氏のご協力とご理解に感謝する。

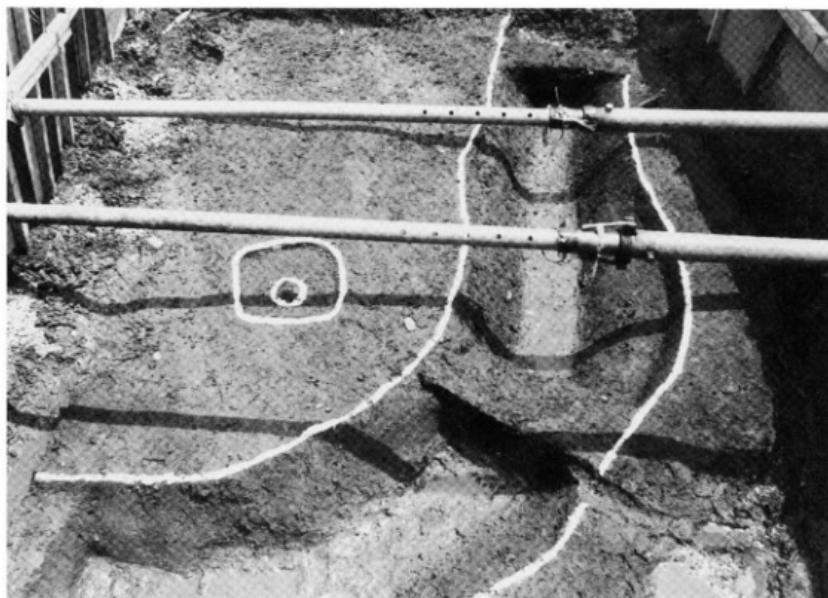
図 版



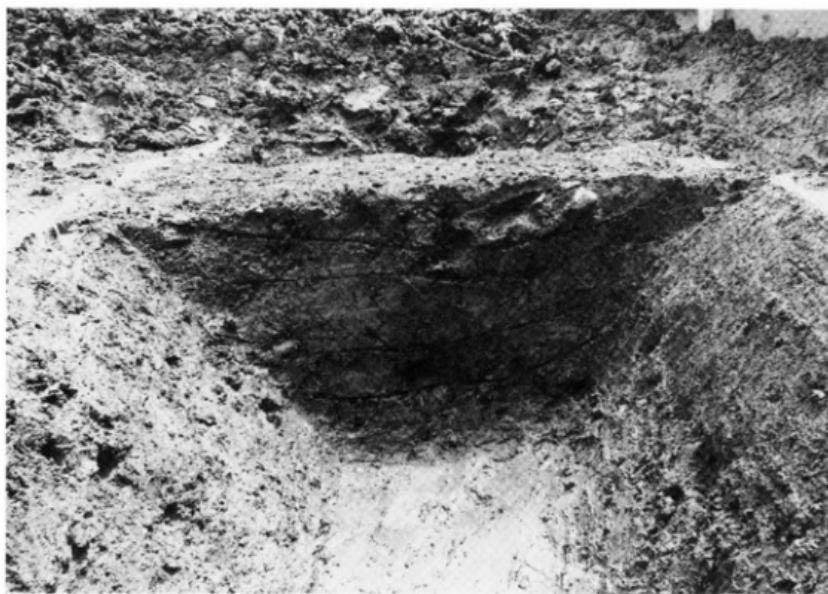
溝1（東から）



溝1（南から）



溝1（北から）



溝1断面



遺物出土狀況



遺物出土狀況



出土遺物



出土遺物



出土遺物



第1トレンチ（北から）



第2、3トレンチ（南から）

図版八 平尾山古墳群



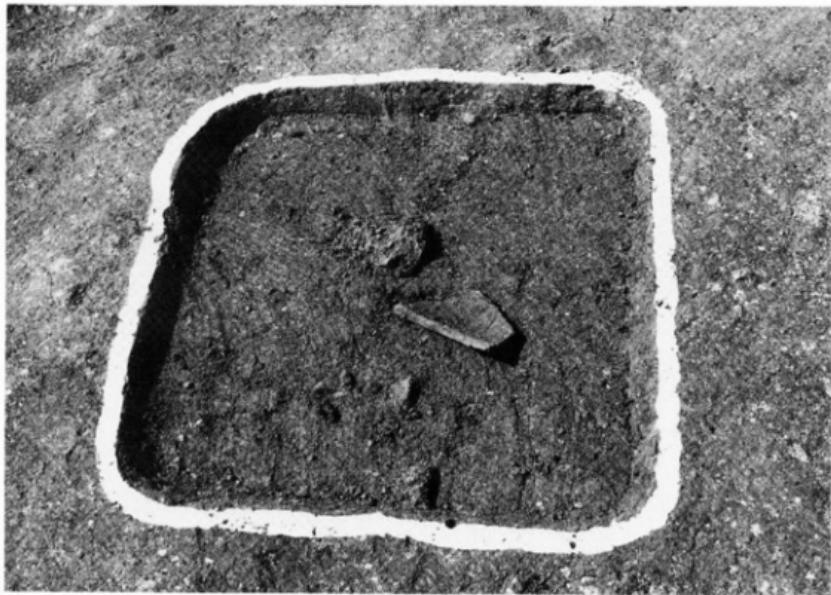
第1トレンチ（北から）



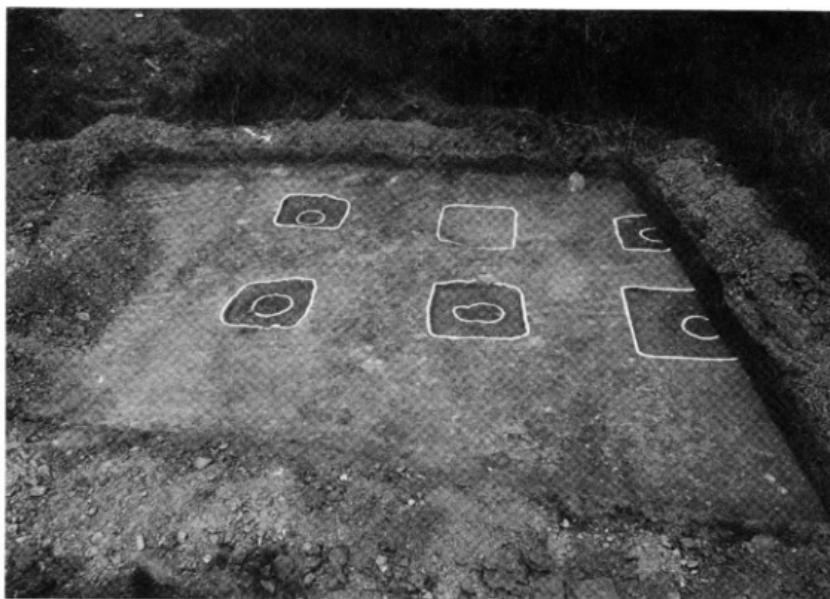
第3トレンチ（南から）



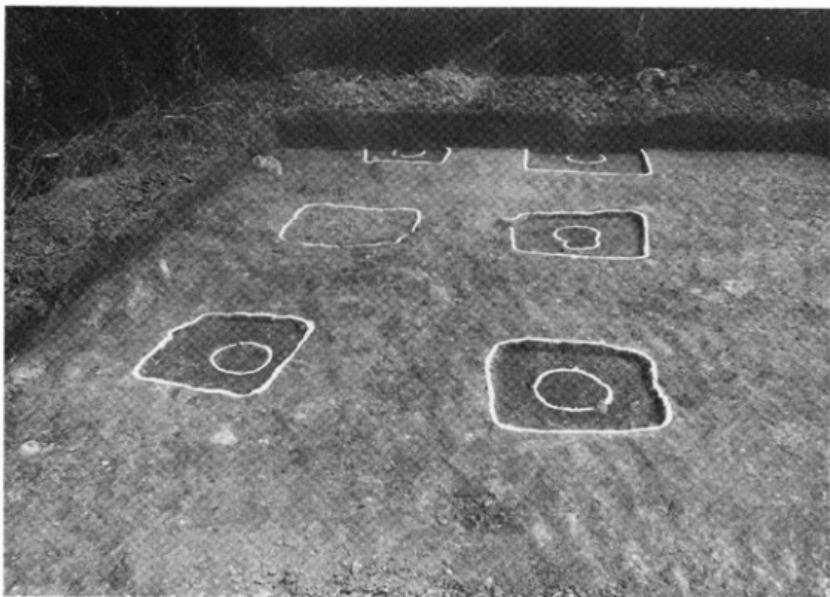
第1トレンチ (西から)



第1トレンチ ピット2



第3 トレンチ (東から)



第3 トレンチ (南から)



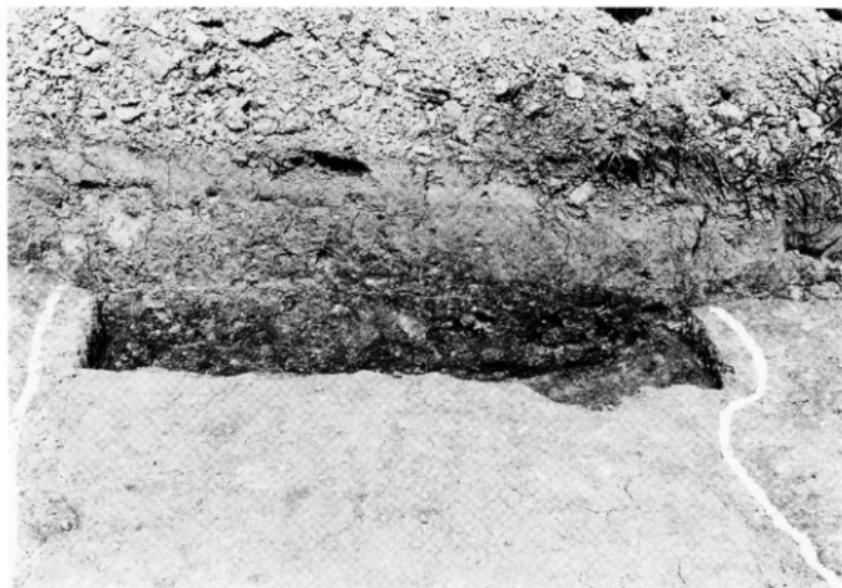
第4トレンチ（南から）



第6トレンチ（南から）



第5トレンチ（南から）



第5トレンチ 溝断面

柏原市所在遺跡発掘調査概報

1990年度

編 集 柏原市教育委員会

発 行 柏原市教育委員会

発行年月日 平成3年3月30日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

